

豊田 堯著

バブーフとその時代

河野 健 二

本書は、フランス革命期にあらわれた「共産主義者グラックス・バブーフの生涯と思想をあとづけたものである。バブーフについては、フランスではかなりの研究があり、革命史家だけでなく、社会思想の研究者も多くの関心をよせているが（たとえば、ガロデーやラスキなど）、わが国ではこれまで研究らしいものはほとんど見ることができなかつた。この意味で、本書はこれまでの空白をみたくしてあまりあるものであり、著者の努力を多としなければならぬ。およそ四五〇ページに及ぶこの大著は、多くの読者に接近可能なものとはいえない。そこでまず、本書の概要を読者に紹介する。大著にふさわしく、本書は序論と、四つの篇からなる。その題名は次のとおりである。

- 序論 バブーフ研究の意義と方法
- 第一篇 バブーフの人間形成とフランス革命
- 第二篇 総裁政府時代の社会
- 第三篇 バブーフの陰謀事件
- 第四篇 バブーフの思想

まず、序論のなかで著者は、フランス革命史研究における「陰謀説か環境説か」という二つの「流れ」について考察する。フランス革命の根本原因を「陰謀」に求めるか、それとも「環境」に着目させるかというこの論点は、主としてアメリカ人ルイ・ゴッチェークによつて一九三一年に定式化されたものであるが、著者はこの論点を踏襲しつつ、テーヌにはじまる「陰謀説」と、オーラルに由来する「環境説」との対立をあとづける。この対立は、実はフランス革命を非難するか、弁護するかという対立にたつらなるものであり、ひいてはそれはフランス革命についてのこれまでの研究の在り方そのものを表現する。したがつて、著者は「陰謀説か環境説か」という対立を手がかりにしながら、テーヌからルフェーブルにいたる革命研究の発展史を概観しており、同時にそれを述べることで本書の導入部を構成している。著者の説明によると、「現在の学問段階において環境説は革命史研究のすべてであるといつて過言ではない」が、「しかし陰謀説は完全に死に切つていない」で、例えば「環境説の巨頭」マチエですら「革命が少数人の事業であること」を認めており、陰謀説は「なお生き続けている」という（四四、四八ページ）。そして、著者はバブーフの陰謀事件を分析することのなかから、陰謀説といわれる主張の正当性を検討しようとする。

著者の第二の関心は、社会主義思想の歴史のなかにバブーフをどう位置づけるかという問題である。著者によると、バブーフおよびその一派はフランス革命期におけるただ一つの社会主義集団であつたばかりでなく、社会主義実現のための権力闘争をいかに展開すべきかについて明確な認識をもつていたといわれる。とすれば、ブル

ジョア革命たるフランス革命のなから、どうしてバブーフのような思想と実践が生まれてきたのであるか、「バブーフ個人と歴史（革命史）」との交錯（ハ三ページ）はどのようなものであつたかという問題が当然うまれてくる。著者は、「フランス革命と社会主義」との関連について、これまでの研究史を回顧しながら問題点を解明している。

本論に入つて、まずバブーフの伝記のうち、フランス革命期（テ
ルミドール反動まで）における彼の思想と行動が紹介される。注目
される二、三の点をあげると、バブーフは父の冒險的な生涯——ド
イツ連隊への入隊、脱走、オーストリア軍隊で少佐になり、のちの
皇帝ヨーゼフ二世の師傅となつたが、帰国後、荘園の徴税人となり、
さいごは土工に没落——から影響をうけていると思われること。ピ
カルディの貧農と土地台帳代理人（監督官という訳語は適当でない
と思う。コミッセール・ア・テリエというのは、役人ではなく一つ
の職業であろう）としてのバブーフとの接触および共感。革命の前
に、すでにバブーフは土地および生産物の共有についての主張を述
べていること（デホビア・ド・フォアスへの手紙、一〇四ページ）——
もつともこれを著者のいうように「まことに破天荒な」（一一〇ペ
ージ）ものと扱ひうるかどうかは疑問である。これ以前に、マブリ
ー、モレリ、ランゲ等の思想家の著作があるからである。さらに、
著者はルソーを簡単に「復古主義者」と見ているが、これにも同意
できないし、「ルソー研究」その他の従来の研究がまったく顧みら
れていないことも不可解である。さいごに、一七九一年頃のバブー

ーフの思想は、なお「農地均分法^{ロバ・ゲレル}」の立場にたつており、ベシオン、
ロベスピエールもまたこの立場であると彼が見なしていたこと、な
どである。バブーフは、九二年八月一〇日の革命以後、それまでの
煽動家、パンフレット作者としての役割から、地方行政官に転ずる
が、政敵の追求をうけて職を追われ、いわば地下活動者としてシル
ヴァン・マレシャルやジョーメットなどと連絡をとつていた。彼が
公然と政治活動に乗り出すのは、テルミドール以後のことであつた。
バブーフの「陰謀事件」は、このとき以後出発するのであるが、
ここで著者は一転してディレクトワール時代の社会構造の分析に筆
を進める。それはバブーフの陰謀の「前提」をなすものだからであ
る。ここで扱われているのは、九五年の憲法によつて規定された権
力組織——行政・立法・司法制度——と、財政政策——紙幣インフ
レーションの様相——である。後者のインフレーションの問題は、
いわゆる原始的蓄積の内容をなすものであつて、大衆からの急激な
収奪、階級分化の促進を通じて、そこからバブーフ運動もはじめて
生まれてくるのであるが、著者はこの問題を第一次大戦後のドイツ
のインフレーションなどの「古典的原型」という工合に理解してお
り（二一五ページ）、またこの時期のインフレーションをデフレ
ションの単なる反対物という観点でとらえている。この点は、再考
を必要とするであらう。

ついで、バブーフの陰謀事件に移り、その動機と組織、計画と宣
伝の詳細があとづけられる。この部分は、これまでほとんど知られ
ていないだけに極めて興味ふかい。本書の核心をなす部分である。
著者の説明をくわしく紹介する余裕がないので、私の気づいた点を

いくつか挙げておこう。バブーフが一七九五年十月に突如として釈放され、さらに引き続きプレシーの牢獄の同志たちもすべて釈放されたのは、王党派の抬頭に対抗するために左翼を利用するという総裁政府の政策的意図にもとづくものであり、バブーフが彼の行動の本拠をおいたパンテオン・クラブもまた政府の庇護のもとに作られたものであつた(二三八ページ以下)。この点は、バブーフの運動とその急速な挫折を理解する上で、決定的に重要だと私には考えられるが、著者はこの点を指摘しながらも、その意味を割合かくく見ていると思う。パンテオン・クラブは九六年二月、反政府的言動の故に閉鎖され、三月末からバブーフの叛乱委員会が発足するが、この経過を見ていると、バブーフの「陰謀」があまりに安易で、あまりにマヌーヴァ的であるのにむしろ驚かされる。そこには、「陰謀」があり、「秘密組織」があり、「軍隊工作」があることは確実であるが、しかし一般民衆の自発的な行動や、理想や大義への献身・情熱といったものとの結合がほとんど見られないように思われる。むしろ、少数者の政権欲と、そのためのクーデタが何者かによつて挑発されているという感じを私は受取つた。バブーフの陰謀が仲間のグリーゼルによつて簡単に裏切られたり、またバブーフの「護民官」の購読者が陸海軍の軍人や、大実業家、モンターニュ派の残党その他、医者や弁護士などの自由職業の人々であり、貧農や労働者などを全く含んでいないこと(三八一ページ)を見てもその感がふかい。この点について著者はいう。「要するにバブーフの陰謀は(中略)偶然に滅び去つたというよりは、当然滅びるべくして崩壊したといつた方が正しいのである。そこに少数者の政治行動の限界

が存したのであつた。資本主義の上昇期に当り、旧制度以来の共同体が壊されて農民に統一なく、発生期の大工業において労働者の組織なく、かれらに階級的自覚のなかつた時代に、バブーフの陰謀事件は早過ぎたといわざるをえないのである」と(三八五ページ)。

バブーフの運動のなかに「少数者の政治行動の限界」なるものを見ることが正当であるとは私は思わないが、その他の点ではこの見解に同意したい。しかし、もしバブーフの運動が「早過ぎた」とするならば、一体この「早過ぎた」運動を促がしたものは何であつたか、この運動はブルジョア革命としてのフランス革命に一体なにを寄与したということができるか、そもそもバブーフを取り上げることでフランス革命のなかが明らかにになると著者は考えているのだろうか、——こうした疑問を禁ずることができなかつた。

バブーフの思想については、これまでの諸篇でかなり扱われているが、著者は改めて第四篇を設けて、「バブーフの社会主義の本質」を問うている。バブーフの思想は、たしかに追求する値うちのあるもので、興味をそそられる。著者は、ここではルフェーブルとゲラソンの見方をとり上げて、著者自身の見方をこの両者の中間に設定している。ルフェーブルはバブーフの共産主義を「農村の共産主義」と規定し、それはなんら近代的要求をもたない「分配の共産主義」であり、農業経営の共同化ではなく、ただ生産物の共同分配のみを考慮したにすぎないとする。これに対して、ゲランはバブーフこそ「資本論の第一章」を書いた人物であり、経済の組織化と生産手段の共有化の上に新しい経済体制をうち立てようとしたものであるとする。バブーフの階級闘争論はソヴェト形体のデモクラシーの先駆

をなすものであると見ている。こういう見解の対立——この対立は簡単に妥協をはかり得ないほどのかなり深刻な対立だが——にたいして、著者はバブーフの思想が、ロベスピエールやサン＝ジネストなどの思想とは全く別個のものであること、しかしバブーフの共産主義は高業についていかぎり「分配の共産主義」であることを免かれず、工業や機械生産については計画生産を主張しているものの、全般的には「分配の共産主義であつたと判断して間違いない」（四一九ページ）とする。著者のこうした「判断」が、ルフェーブルとゲランの見解の対立の中間をとつたことになるというその理由が私にはよく分らないが、おそらく著者の最終的な評価は次の一文のなかに見られるものと思う。「バブーフは自然法と社会契約論に立脚しながらも、十八世紀の思想家（とくにルソー）のように、過去に帰ろうとするのではなく、未来の建設に、新しい共同幸福の社会の建設に、限らない希望を托し、そのような理想社会達成のために、暴力革命を是認し、肯定する理論を抽きだした。バブーフ自身は、無神論的唯物論と、はつきりとした階級国家観を懐き、階級闘争の理念に到達していた」（四三七ページ）。著者のこの評価は、現代のフランスの共産主義者ガローディのバブーフ論とほぼ同じだといつてよいであらう。

以上、私の感想をも織りませながら、本書の基本構想を紹介してきた。さいごに、なお一、二の感想を述べておきたい。著者は最初に「陰謀説か環境説か」というテーマから本書を出発させているが、本書を通読してみても、この問題にどういふ解決があたえられた

かという点がやはり疑問として残されると思う。バブーフの運動が、文字どおり「陰謀事件」であつたことが明らかになつたとして——著者はそう取扱つているが——、もしそうならフランス革命そのものは、どの程度に「陰謀」であり、あるいは「陰謀」でないのか、この点についての解明をもう少しつつこんでもらう必要があつた。本書の副題が「フランス革命の研究」となつて以上、こういう要求を出しても無理ではないであらう。いま一つは、著者が豊富な資料や研究書を駆使して、未開の領域を開拓された功績は認めるが、しかしともすれば著者がフランス人の研究者たちの志向や評価に引きずられて、著者自身の論理を押し出すことには消極的であるかのような印象を受けた。著者の博識には敬意を表するが、そのために筋が通らないような感じをもつた個所がいくつかあつた。

その他、訳語の問題や、新しい用語——たとえば「庄力団体」とか「サブ・リーダー」など——の使い方や適当でない個所が目についたが、すべて省略する。いずれにせよ、バブーフという特異な、興味ある人物の思想と行動とに、これほどの熱意を傾けられた著者の数年來の努力に敬意を表したい。これを機会に、わが国でもバブーフをめぐる論議が盛んになることを期待したい。この一文では、かなり苦言を呈することとなつたが、他日再検討の折に、いくらか取入れてもらえるなら幸いである。（A5版四四五頁 昭和三十三年六月創文社発行 定価七〇〇円）